

FLORA KANAGAWA

May. 18. 2016 No.81

神奈川県植物誌調査会ニュース第 81 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@flora-kanagawa2.sakura.ne.jp



図 2. アキザキヤツシロランの花 (横浜市 2015.9.18 中島 稔撮影).

横浜市で確認されたアキザキヤツシロランとその共生菌について

(中島 稔)

晩秋、私の散策範囲、東京の多摩丘陵から横浜市北部の里山や公園を歩くと、クロヤツシロラン *Gastrodia pubilabiata* Sawa の果穂をよく目にする。目印を立てておいて翌年の初秋に探すと簡単

に開花株が見つかる。クロヤツシロランは至る所に分布するが、アキザキヤツシロラン *Gastrodia confusa* Honda & Tuyama にはまだ出会えたことがなく、一度会いたいものだと思っていた。

アキザキヤツシロランは、神奈川県下では沿海部に点在、『横浜の植物』(横浜植物会編, 2003) には掲載されていないので横浜市には分布しない



図1. アキザキヤツシロランの果穂（横浜市 2014.10.24 中島 稔撮影）。

ものと思っていた（後日、緑区ほかで採集された標本がわずかにあることに気付いた）。

一昨年 2014 年 10 月 24 日、散策コースの都筑区のモウソウチク林脇を通ると、たくさんの果柄が林立していることに気付いた。見慣れているクロヤツシロランの果柄とは色が違う。クロヤツシロランの焦げ茶～黒色と違い、ほぼ灰色だ（図 1）。「これはアキザキヤツシロランに違いない」と思った。

翌 2015 年 9 月 18 日、そろそろ花が見られる頃ではないかと思い、確認に出掛けてみたところ、期待どおり開花株を見る事が出来た（図 2）。分厚いモウソウチクの落葉の絨毯を突き破って花柄が飛び出している。花茎はクロヤツシロランより高く出るようだ。花数も多い。雨後であったためかグリーンの色が鮮やかだ。花被が全開しないのが特徴とされているが、中には全開に近いものもある。

数日して再訪してみたがあまり増えていなかった。2014 年の果穂の状態では 30～40 株に見えたが、2015 年の開花は 10 株程度。それでも初めて見たアキザキヤツシロランの花に満足した。

さて、以下、話題を共生菌に逸れさせていただく。

数年前、クロヤツシロランとアキザキヤツシロランの共生菌が解明された（Ogura-Tsujita *et al.*, 2009）が、担子菌類のクヌギタケ属であったが種名までは特定できていなかった。クロヤツシロランとアキザキヤツシロランは共通の菌であり、そのため、両種が混生するケースがしばしばあるよ

うだ。クロヤツシロランにはもう 1 種、杉林、竹林内の落葉を分解して生きているごく普通の菌とも共生できるため、県下至るところに分布しているが、反面、アキザキヤツシロランはただ 1 種の希少菌だけとしか共生できないので生存には不利で、分布も少ないようだ。

この希少菌、2013 年、千葉科学大学の糟谷大河講師により解明された（糟谷, 2013）。ラン科の共生菌はかなり解明されているが、ほとんど属レベルまでであり、種が特定されてもなじみの無い菌であったり、肉眼的に確認できる子実体（キノコ）を作らないものがほとんどである。このアキザキヤツシロランの共生菌は、クヌギタケ属 *Mycena* のまだ正式に発表されていない仮称カヤバノクヌギタケ *Mycena* sp. という菌と同定された。昨年、やはり糟谷講師により、ごく稀ではあるが県下でも記録のあるミヤマサクラタケと仮称している菌と同じものであることも判明した。この菌、モウソウチク林、及びススキ周りで落ち葉を分解して生活している腐生菌とされている菌であるが、なぜかアキザキヤツシロランはモウソウチク林にしか見つからない。ススキ草原の周辺に出現しても良さそうなのだが、何か別の要因が関係しているのだろうか。

引用文献

Ogura-Tsujita, Y., Gebauer, G., Hashimoto, T., Umata, H., & Yukawa, T., 2009. Evidence for noveland specialized mycorrhizal parasitism: the orchid *Gastrodia confusa* gains carbon from saprotrophic *Mycena*. Proc. R. Soc. B. 276: 761-767.

糟谷大河, 2013. カヤバノクヌギタケの生き方を探る。石川きのこ会会報「こけとみみ」, 30: 5-10.



図3. アキザキヤツシロラン（カヤバノクヌギタケ）の共生菌であるミヤマサクラタケの子実体（横浜市旭区 2015.6.12 中島 稔撮影）。

神奈川県 タネツケバナ類* (堀内 洋)

はじめに

『神奈川県植物誌 2001』にはタネツケバナ類として6分類群が報告されている(城川, 2001). 筆者は同書に記載のないアキノタネツケバナ *Cardamine autumnalis* Koidz. とニワサキタネツケバナ *Cardamine* sp.; *Cardamine niwasaki* Horiuchi nomen nud. を県内で確認しているの、以下に、これらを追加した検索表を示し、同定のポイント等を若干解説する。ただし、広義のタネツケバナ *Cardamine flexuosa* With. (ミズタネツケバナ *Cardamine flexuosa* With. var. *latifolia* (Maxim.)



図 1a. 葉の二葉性が顕著な例 (タチタネツケバナ; 上の円内の茎に付く葉と下の円内の根生葉で著しく葉形が異なることが分かる. 横浜市中区新港ふ頭 吉川アサ子 2000.4.29 KPM-NA0119138) .

Makino を含む) とオオバタネツケバナ *Cardamine scutata* Thunb. について筆者は十分理解できていないため、堀内 (2003b) と同様に検索表からミズタネツケバナなどを除いた。

タネツケバナ類の同定のポイント

タネツケバナ類は葉の形質に分類群の特徴が比較的出やすい。検索表では葉の形質を取り入れ、開花～種子散布期以外の個体でも同定できるように努めた。一方、タネツケバナ類は同一個体でもロゼット葉、茎の下部、中部、花序直下につく葉で小葉の形や数が著しく変わる分類群 (タチタネツケバナ *Cardamine fallax* (O.E.Schulz) Nakai, ミチタネツケバナ *Cardamine hirsute* L. など. 概ね茎上部の小葉は幅が著しく細くなり小葉の数も減じる; 図 1a) と茎上部にゆくにつれ小葉の大きさ・数が徐々に小型化・少数化する分類群 (コタネツケバナ *Cardamine* sp. など; 図 1b) がある。同定に際しては葉の二形性や観察すべき位置の葉に留意する必要がある。

県内産のタネツケバナ類は、同定のポイントを押さえ、各分類群の特徴を認識すれば、一部の分類群を除きそれ程判断に迷うことはない。その為には、花茎に花とある程度充実した果実がある植物体を地下部から採集し、綺麗に葉を広げた標本が必要である。県内の生育状況が必ずしも十分に明らかになっていないアキノタネツケバナとコタネツケバナの採集適期は、それぞれ 10 月～12 月頃と 3～4 月頃と考えられる。本稿が県内のタネツケバナ類の解明に役立てば幸いである。



図 1b. 葉の二形性が顕著でない例 (コタネツケバナ; 右から左に茎基部に着く葉から茎上部に付く葉を並べている. 茨城県つくばみらい市福岡大堰付近小貝川河川敷 2007.3.10) .

検索表

1. 葉柄基部に開出気味のやや長い刺毛状の毛が散生する (図 2a). ふつう雄しべは 4 本 (時に 5, 6 本の花が混じる)
2. 茎は無毛 (1a) ミチタネツケバナ
2. 茎に毛が生える (特に茎下部に多い) (図 2b) (1b) クキゲミチタネツケバナ
1. 葉柄基部に上記のような毛は無い. ふつう雄しべは 6 本 (コタネツケバナの無花弁花では 4 本)



図 2a. ミチタネツケバナの葉柄基部に見られる刺毛状の毛 (左は茎基部のロゼット葉, 右は茎上の葉. いずれも茎は無毛で葉の基部に刺毛状の毛があるのが判る. 横浜市南区六ツ川こども植物園の庭 堀川美哉 1994.3.25 KPM-NA0096847) .



図 2b. クキゲミチタネツケバナの茎と葉柄 (主茎だけでなく側枝にも毛が生える. 葉柄基部の毛と茎の毛は性質がやや異なる. 足柄下郡湯河原町広河原林道入口 勝山輝男 1996.4.26 KPM-NA0100787) .

2. 茎中～下部の葉の葉軸にしばしばサジ状の小片がある. 茎中部の葉の小葉には明瞭な柄がある (図 3a, b)
3. 茎は堅く, 葉は顕著な二形性を示し (図 1a), 葉身は県内産の他のタネツケバナ類に比べ堅め. 小葉や小葉の裂片の先端は急に短く尖り鋭形からやや鋭尖形で頂部にしばしば小突があることが多い (図 3a). 春～初夏を中心に咲く (2) タチタネツケバナ
3. 茎は柔らかく, 葉は顕著な二形性を示さず (図 4a), 葉身は柔らかく標本にすると薄膜質でしばしば黄緑色を帯びる. 小葉や小葉の裂片の先端は円形からやや切形に近い円形で頂部は無突起か極小さな小突があることが多い (図 3b). 夏の終わりから冬の初めを中心に咲く (3) アキノタネツケバナ
2. 葉軸に小片はない. 茎中部の葉の小葉には明瞭な柄がない
3. 頂小葉は大型で側小葉の 2 倍以上 (4) オオバタネツケバナ
3. 頂小葉は小さく側小葉よりやや大きいか 2 倍程度
4. 茎下部には細かい毛が生える. 花弁は発達し萼片より長い. 種子の縁に翼はない.... (5) タネツケバナ
4. 茎は無毛もしくは茎下部に小刺毛がまばらに生える
5. 花弁は退化～萼片よりやや長くなり, 雄しべは 4 本 (無花弁花) または 6 本. 熟した種子の縁に幅の狭い膜質の翼が発達する (図 6). 茎最下の葉は複数の側小葉がある (図 1b) (6) コタネツケバナ
5. 花弁は小さく萼片よりやや小さいか同高. 雄ずいは 6 本. 種子の縁に翼がない. 茎最下の葉は単葉か一對の側小葉がつく程度で少ない (図 7) (7) ニワサキタネツケバナ



図 3a. タチタネツケバナの茎の中部につく葉 (千葉市泉自然公園 浅野貞夫 1971.5.6. CBM183146) .

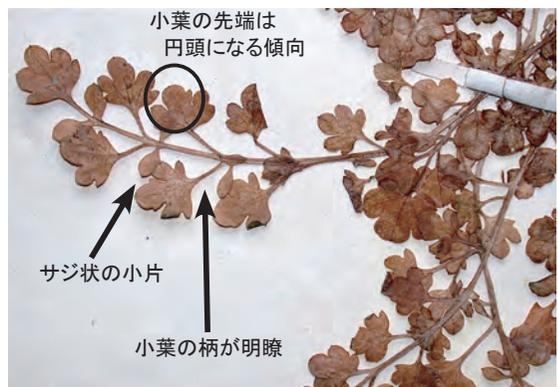


図 3b. アキノタネツケバナの茎の中部につく葉 (土佐高岡郡 牧野富太郎 TI) .

種の解説

(1a) ミチタネツケバナ *Cardamine hirsute* L.

典型的な個体であれば草姿等で判断がつくが、本種の最も良い判別形質は、城川 (1999) が指摘する葉柄基部に散生する開出ぎみのやや長い刺毛状の毛である (図 2a)。この毛は、県内産の他のタネツケバナ類には見られない特徴的な毛であり、一度認識すれば、県内産の既知種との識別に困ることはない。また、雄しべが通常 4 本 (時に 5 本や 6 本の花が混じる) であり、通常 6 本の県内産既知種と区別できる (ただし、無花弁したコタネツケバナの花では 4 本が普通)。

なお、なお、日本に帰化している個体はふつう茎が無毛であるが (図 2a) が、時にやや長い毛がある個体がある (図 2b)。毛は茎の基部で量が多い傾向があり、この型を (1b) クキゲミチタネツケバナといい原産地のヨーロッパでも報告があるほか、県内でも稀に見られる (堀内, 2003a; 2003b)。

(3) アキノタネツケバナ *Cardamine autumnalis* Koidz. in Bot. Mag. Tokyo 43: 404 (1929)

Koizumi (1929) により Yokosuka (Wichura, Oct. 18 1860) の標本を元に記載された神奈川県を基準産地とする植物である。新種記載以降、堀内 (2003b) により報告されるまで分類群として正しく認識されてこなかったものである。筆者が確認した分布域は本州、四国、九州 (屋久島を含む) におよび、場所によっては普通に見られる。

10 月に採集された標本を元に記載され、秋に由来する種小名、和名が付けられているためか、秋



図 4a. アキノタネツケバナの生育状況。谷津田の水田脇の小水路に生える様子。このように地表に常に水があるような環境に生えることが多い。右側の株は既に茎下部で葉腋から脇芽と根が出ていた (千葉県 2002.10.14 堀内 洋撮影)。

に開花したタネツケバナが本種にあてられていることがある。本種は茎の中部以下の葉の葉軸にサジ状の小片を付けるのでタネツケバナと区別できる。このサジ状の小片は県内の既知のタネツケバナ類では本種とタチタネツケバナのみに見られる良い判別形質であるが、全ての葉に認められるものではないので注意を要す。タチタネツケバナとは検索表に示すように葉の二形性、葉質、小葉の先端の尖り具合等で識別できるが、水湿地に生えるタチタネツケバナはこれら葉の形質がアキノタネツケバナに似る場合があるので注意が必要である。

本種の最大の特徴は、開花後、葉の葉腋から脇芽を出し、茎が倒れると発根し栄養繁殖をおこなうことである (図 4a, b)。この繁殖様式は県内産も他のタネツケバナ類には見られない特徴である。原記載中の “Caulis … ramis brevibus apice fasciculatofoliiferis.” (茎は … 短い枝を出し先端に葉を束生する) は茎の葉腋から出た発根前の脇芽の様子を記載したものであると思われる。

本種の生態写真が載っている図書として堀内



図 4b. アキノタネツケバナの標本。親株は種子散布期を過ぎ葉も枯死しているが、葉腋から子株が成長しつつあり栄養繁殖を行っている様子が分かる。添付の和歌がアキノタネツケバナの特徴を良く捉えている (京都市東山区山階西野 黒川喬雄 1962.1.14 TNS223126)。

(2003b) や岩槻 (2006; 2014) がある。

(6) コタネツケバナ (コカイタネツケバナ)
Cardamine sp.

本種は正確な実体が余り認識されていない植物である。村田 (1954) が、京都府八木町付近の水田で採集した本種をコタネツケバナの和名と *Cardamine parviflora* L. の学名をあて帰化植物としたのが、最初の確実な報告である。筆者は 1990 年に茨城県内の小貝川河川敷で本種の無花卉型を見出しタネツケバナとは異なる植物として当時ボウズタネツケバナと仮称していた。その後、花卉の有無に変異があることに気づき、堀内 (1998) で学名不明のままコカイタネツケバナと仮称した。堀内 (2003b) では、村田 (1954) の証拠標本と考えられる標本 (図 5) を京都大学総合博物館 (KYO) で確認し、コカイタネツケバナはコタネツケバナと区別できないことを明らかにし、コタネツケバナの和名を採用しコカイタネツケバナを別名とした。

村田 (1954) 以降、本種の学名には *C. parviflora* の学名があてられてきたが、ヨーロッパの図鑑類

をみると小葉が細長いなど明らかに異なる分類群である。米倉 (2012) はコタネツケバナに *C. debilis* D. Don をあてているが、筆者は原記載や *C. debilis* と確実に同定された標本を見ておらず判断がつかない。Hara (1979) は *C. debilis* をタネツケバナ *C. scutata* Thunb. subsp. *flexuosa* (With.) H. Hara のシノニムとしている。堀内 (2003b) で小貝川の個体群は在来系統であることを指摘したが、本種は古くから国内で採集されており未記載の在来種と考える。なお、コタネツケバナの和名は明治時代以降、タネツケバナ類の様々な分類群に当てられてきたが、村田 (1954) が本分類群に対し明確にコタネツケバナの和名を対応させ、今日その対応関係が定着していると考えられるので、堀内 (2003b) 同様に従いたい。

本種の熟した種子の周囲には膜質の狭い翼がつき (特に種子本体の上部と下部に発達)、県内産の他のタネツケバナ類と明瞭に区別できる (図 6)。この特徴は既存の文献でも取りあげられており、長田 (1976) に図が載っている。

本種の花弁は冠水状態で生育・開花した個体では退化し無花卉花となり、雄しべは 4 個となるが、冠水しない環境下で生育・開花した個体は花卉が発達し、萼より大きくなり目立ち、雄しべは 6 個が発達する。無花卉花の小型の個体は時にニワサキタネツケバナと紛らわしいが、ニワサキタネツケバナは雄しべが常に 6 個で種子に翼は発達しないので区別できる。

関東平野での観察では、河川氾濫原の陽光水湿



図 5. コタネツケバナの標本。村田 (1954) の証拠標本と考えられる。本種は茎の基部が這ってから直立することが多く標本に特徴が現れている。ラベルは「*Cardamine parviflora* L. ヒメタネツケバナ」とされる (丹波八木町 村田 源 No.5708 1952.4.20)。



図 6. コタネツケバナの種子。明らかな膜質の翼が発達する。翼は種子の上下の方が側面より発達する傾向がある (茨城県下妻市横根地先小貝川河川敷 堀内 洋 No.5309 1991.4.11)。

裸地やヤナギ林下の無植生地等の場合によっては一面に群生する冬型一年草で、3～4月に開花～結実するが、それ以外の環境や時期には全く見られない。その為、分布していても気づかれる機会が少なく、観察、採集される確率も低い。確実に同定するには、ある程度熟した果実を見る必要があり、その適期は関東平野では3～4月である。

関東地方の本種の写真や図が載っている図書として堀内(1998; 2003b)や岩槻(2006; 2014)がある。

(7) ニワサキタネツケバナ *Cardamine* sp.;
Cardamine niwasaki Horiuchi nomen nud.

堀内(2003b)により提案された学名不詳の分類群。昔ながらの踏み固められた裸地気味な庭の他、植え込みや植木鉢などに生える小形の短命な一年草で、花卉は発達しない。雄ずいは6個。根生葉は少なくロゼットとならず、長い柄の先に単葉を付けることが多い(図7)。県内でも小崎(1994)や城川(1999)にタネツケバナとして標本のコピー陰影や葉の図が取りあげられている。特に小崎(1994)の全草のコピー陰影はニワサキタネツケバナの特徴が良く判る。県内でもごく普通に見られる。本種の写真が載っている図書として堀内(2003b)や岩槻(2006; 2014)がある。

謝辞

以下の標本館のみなさまに標本閲覧でお世話になった。お礼申し上げます。千葉県立中央博物館(CBM)、神奈川県立生命の星・地球博物館(KPM)、京都大学総合博物館(KYO)、東京大学総合研究博物館(TI)、国立科学博物館(TNS)。

引用文献

- Hara, H., 1979. *Cardamine* L. Hara & L. H. J. Williams (eds.), An Enumeration of the Flowering Plants of Nepal 2. pp.40-41. Trustees of British Museum (National History), London.
- 堀内 洋, 1998. 河川敷の変わり者を捜してみませんか? —コカイタネツケバナ(仮称), コカイツルボ(仮称)—. 千葉県植物誌資料, (13): 94-96.
- 堀内 洋, 2003a. 神奈川県に關係する帰化植物数種について. *Flora Kanagawa*, (54): 647-651.
- 堀内 洋, 2003b. タネツケバナ属. 財団法人千葉県史料研究財団編, 千葉県の自然誌 別編4 千葉県植物誌. pp.242-243, 246-250. 千葉県, 千葉.
- 岩槻秀明, 2006. 街でよく見かける雑草や野草がよーくわかる本. 527pp. 秀和システム, 東京.
- 岩槻秀明, 2014. 最新版 街でよく見かける雑草や野草がよーくわかる本. 543pp. 秀和システム,



図7. ニワサキタネツケバナの生植物。茎基部の葉が単葉であることが判る(横浜市神奈川区大口仲町2007.11.18)。

東京.

- 城川四郎, 1999. タネツケバナ類 (*Cardamine*) の検討. *Flora Kanagawa*, (48): 542-545.
- 城川四郎, 2001. タネツケバナ属. 神奈川県植物誌調査会編, 神奈川県植物誌 2001. pp.770-774. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- Koidzumi, G., 1929. *Contributions ad Cognitionem Florae Asiae Orientalis*. Bot. Mag. (Tokyo), 43: 382-407.
- 村田 源, 1954. 植物分類雑記2. 植物分類・地理, 15: 175-177.
- 長田武正, 1976. 原色日本帰化植物図鑑. 425pp. 保育社, 大阪.
- 小崎昭則, 1994. 神奈川県産の植物補遺(4). *Flora Kanagawa*, (39): 419-422.
- 米倉浩司, 2012. 日本維管束植物目録. 379pp. 北隆館, 東京.

* ここでは城川(1999)に準じ、便宜的にタネツケバナに似ている分類群(本稿ではタネツケバナ, タチタネツケバナ, オオバタネツケバナ, ミズタネツケバナ, コタネツケバナ, アキノタネツケバナ, ニワサキタネツケバナ, ミチタネツケバナ)を扱う。

神奈川県にイワヤシダ出現

(岡 武利)

相模原市立博物館の秋山幸也さんからの誘いを受け、2015年6月に相模原植物調査会の野外調査に同行させていただいた。

相模原市緑区のとある山裾に車を停め、林道を歩きだす。急斜面を慎重に下り、小沢を遡行していると先行の会員の呼ぶ声が聞こえる。急いで向かうと指差す先にイワガネゼンマイに似て非なるシダがあった。みずみずしい葉、期待を込めて葉の裏を見る。あった。まだ若くて白っぽいが、硬式野球ボールの縫い目のような線状のソーラスがはっきりと認められる(図1)。神奈川県では初記録のイワヤシダである。付近を調査したところ、幼株も含めると20個体あまりが確認された。

イワヤシダ *Diplaziopsis cavalieriana* (Christ) C.Chr. は中国の標本を基準標本として記載されたシダで、日本では愛媛県岩屋山で発見されイワヤシダと命名された。ノコギリシダ属 *Diplazium* に含まれた時期もあったが、現在ではイワヤシダ属 *Diplaziopsis* として独立させることが定説となっている。

『日本のシダ植物図鑑』(第3巻・第8巻)によると、青森県から鹿児島県までの各地に散在し、神奈川県近隣では千葉県君津市郷台、東京都八王子市恩方、静岡県天城湯ヶ島に分布点がある。神奈川県近隣の都県に産するも、神奈川県内で未確認のシダはトキワシダやイズヤブソテツなど数種類あるが、イワヤシダもその一つで、神奈川県での発見が期待されていた。そのシダが眼前にあるのだ。喜ばずにいられようか。

この日は神奈川県で2ヶ所目の産地となるウ



図1. イワヤシダ (相模原市緑区 2015.8.15 久江信雄撮影)。

スヒメワラビを見ることが目的であったが、ウスヒメワラビに加えてイワヤシダまで見ることができ、望外の喜びであった。野外調査にお誘いいただいた秋山幸也さん、ウスヒメワラビとイワヤシダを見つけ出していただいた相模原植物調査会の皆さまに感謝申し上げる。

標本：相模原市緑区下倉 秋山幸也 2015.6.10 SCM51631; 久江信雄 2015.8.15 SCM52066 (図2)。

引用文献

倉田悟・中池敏之, 1983. 日本のシダ植物図鑑 第3巻. 728pp. 東京大学出版会, 東京。

倉田悟・中池敏之, 1997. 日本のシダ植物図鑑第8巻. 473pp. 東京大学出版会, 東京。



図2. イワヤシダ (相模原市緑区下倉 久江信雄 2015.8.15 SCM52066 秋山幸也撮影)。

シラホシムグラが出現!

(関口克己)

2014年5月に多摩川や鶴見川においてシラホシムグラ *Galium aparine* L. を採集したので報告する。シラホシムグラはヨーロッパ原産の帰化植物で、はじめ、植村ら(2004)により大阪、兵

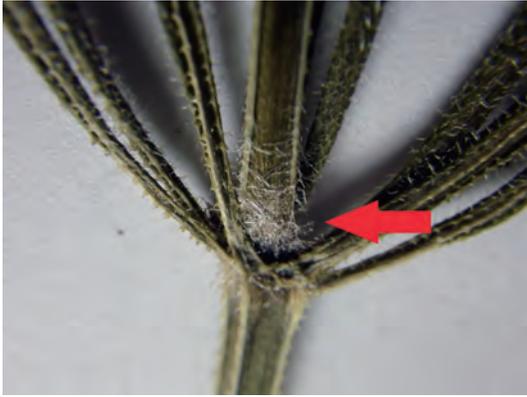


図1. シラホシムグラの茎節部軟毛 (赤矢印部分) (川崎市中原区中丸子 多摩川河岸にて採集したもの 2014.5.6 KMM 関口克己撮影)。

庫, 香川などで気付かれ, シラホシムグラと名付けられた。この時, 植村は, それらしい植物を横浜市の山下埠頭や新港埠頭で見ているとも記している。その後, 木村・小土井 (2008) により, 千葉県江戸川流域に多産することが報告されている。本種はヤエムグラ *Galium spurium* L. var. *echinospermon* (Wallr.) Desp. に近縁であるが, 全体に大きく, 花は白色で径 2mm 内外 (ヤエムグラは黄緑色で径 1mm 内外), 茎節部の上側や下側に白色または淡褐色の軟毛が生えることが良い識別点となる (図 1)。多摩川や鶴見川では, 河岸のヨシやオギにもたれかかるように旺盛に繁茂し, 個体数も多いことから, かなり以前より生育していたものと考えられる。千葉県野田市で 1990 年に採集された標本が確認されているが, 日本への侵入時期は不明である (植村ほか, 2010)。神奈川県では現在のところ 2014 年より古い記録 (神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵標本のみ確認) はないため, 新しい植物誌までには平野部を中心とした各メッシュでの確認と, 各ブロックの収蔵庫にあるヤエムグラの標本を再チェックすることも必要であろう。

この報告を書くにあたり, 神奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男氏には資料をお送りいただいた。この場をお借りして御礼申し上げます。

引用文献

植村修二・水田光雄・藤平明, 2004. 日本に帰化したシラホシムグラ (新称). 帰化植物写真ニュース, (4). 全農協・日本帰化植物友の会, 東京.

木村陽子・小土井智行, 2008. シラホシムグラ (アカネ科) が千葉県江戸川流域に多産. 千葉県植物誌資料, (24): 230-232.

植村修二・勝山輝男・清水矩宏・水田光雄・森田弘彦・廣田伸七・池原直樹, 2010. 日本帰化植物写真図鑑 第 2 巻. 174pp. 全農協, 東京.

イネ科 3 種の古い分布記録

(木場英久)

国立科学博物館 (TNS) の植物標本庫で, 稀産や新産のイネ科植物の情報を得たので報告する。どれも数十年以上も前に採集された古い標本である。

ヒメコヌカグサ *Agrostis valvata* Steud.

本種は本州から九州の湿地に生え, 環境省の RDB (環境省編, 2015) では準絶滅危惧に, 神奈川県 RDB (高桑ほか, 2006) では絶滅危惧 IA 類とされる種である。『神植誌 01』では, 標本記録の明らかであった箱根町仙石原だけに分布点が打たれ, このほかに本文には奥山 (1948) の川崎市多摩区登戸の産地があることが記されている。今回, 登戸 (川崎市多摩区) 産の標本 2 点を確認した。

標本: 登戸 館岡亜緒 No.5005 1965.6.3 TNS180671

(図 1); 登戸 岩田武司 s.n. 1942.5.10 TNS64598.

キダチノネズミガヤ *Muhlenbergia ramosa* (Hack.)

Makino

稈の上部でもよく分枝が起きるのが特徴であ

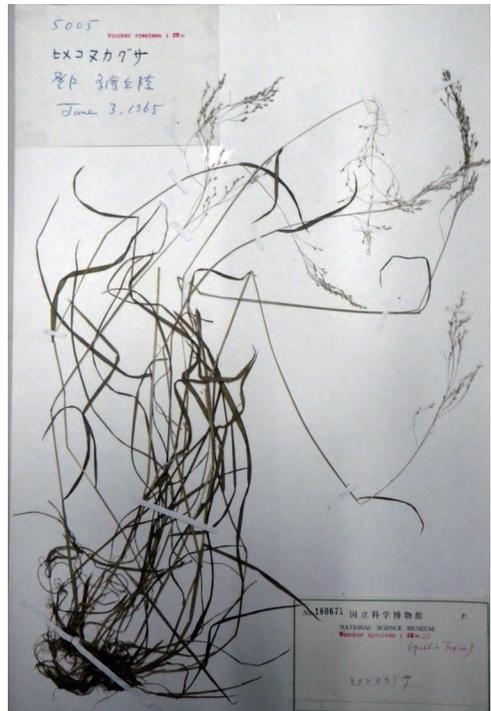


図1. ヒメコヌカグサ (登戸 館岡亜緒 No.5005 1965.6.3 TNS180671 木場英久撮影)。

る。『神植誌01』ではAS, ASO, AT-1, HAT-4, HAY, MIA, MID, OD-4, SAGの9調査区に分布点が打たれ、県のRDB(高桑ほか, 2006)では、そのうち4つは絶滅したとされ絶滅危惧IB類とされている。その後、逗子市や相模原市緑区根小屋(SH)(諏訪部, 2012)で標本が採集されている。今回、湯河原産の標本があることがわかった。



図2. キダチネズミガヤ(湯河原 Tuguo Tateoka 1953.10.3 TNS9022934 木場英久撮影)。

標本: 湯河原 Tuguo Tateoka 1953.10.3 TNS9022934 (図2)。

ミノボロ *Koeleria macrantha* (Ledeb.) Schult. et Schult.f.

明るい草地に生え、上部の稈に短毛が密生し、細い円錐花序をもつ。県のRDB(高桑ほか, 2006)では絶滅危惧種IB類とされる種である。『神植誌58』では、普通種とされたが、『神植誌01』では、12個の調査区に分布点があるだけである。以下の標本は、AT-1, FU-2, HI-?, OD-3の調査区で新産であろう。

標本: 相模荻野村 櫻井半三郎 1884.6 TNS2827; 神奈川県藤沢市亀井野六会日大演習林内 高田貞 1964.6.28 TNS250928; 相模平塚 野口六也 1932.5.15 TNS36489; 平塚付近 1929.5.19 TNS1061183; 相模国足柄下郡国府津町(海岸) 山本肇 No.2214 1933.5.25 TNS226226.

引用文献

奥山春季, 1948. 植物採集覚書(其四). 植物研究雑誌, 22: 30-32.

諏訪部 晶, 2012. 相模原市内でキダチネズミガヤを採集. Flora Kanagawa, (74): 888.

高桑正敏・勝山輝男・木場英久編, 2006. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. 442pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

環境省(編), 2015. レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 8 植物 I (維管束植物). 16pls. +lxii + 647pp. ぎょうせい, 東京.

2013年以降の横浜市港北区・瀬谷区・泉区(戸塚区)の植物誌調査

(佐々木シゲ子・和田良子・野津信子)

2013年~2015年の3年間の植物誌調査の報告です。

【港北区】

現在の新横浜公園(日産スタジアム)はかつては鶴見川中流域の大湿地帯であった。現在は遊水地としての役割を果たしており、6本の水路があり、普段はそこからの水が緩衝池としての人工の大池から鶴見川に流れ込んでいる。ノニガナはその水路沿いの土手の一部に広がって生えていた。

また、日産スタジアム前を流れる鶴見川に架かる亀甲橋下の流れの中にはコゴメイが束になって生えている中洲状の岩盤があり、そこを中心にアイノコイトモ、ヤナギモ、オオセキシウモが流

水中に広がっていた(図1)。



図1. コゴメイが生育する中洲状の岩盤(横浜市港北区 2015.12.8 佐々木シゲ子撮影)。

ノニガナ *Ixeris polycephala* Cass.

標本：横浜市港北区小机町新横浜公園 野津信子・佐々木シゲ子・和田良子 2013.5.27 KPM-NA0167977.

オオセキシウモ *Vallisneria gigantea* Graebn.

標本：横浜市港北区 野津信子・佐々木シゲ子・和田良子 2015.12.8 KPM-NA0182367.

アイノコイトモ *Potamogeton x orientalis* Hagstr.

標本：横浜市港北区 野津信子・佐々木シゲ子・和田良子 2015.10.19 KPM-NA0182352.

ヤナギモ *Potamogeton oxyphyllus* Miq.

標本：横浜市港北区 野津信子・佐々木シゲ子・和田良子 2015.12.8 KPM-NA0182368.

【瀬谷区】

サルココッカ *Sarcococca saligna* (D.Don) Müll.Arg.

瀬谷市民の森のやや暗い森の中で1mほどの高さになり、2015年の5月6日には花が、10月8日には果実が確認された。中国南部～東南アジアが原産地の常緑低木で日陰でも生育する。園芸品の逸出とみられる。

標本：横浜市瀬谷区瀬谷市民の森 野津信子・佐々木シゲ子・和田良子 2014.11.3 KPM-NA0299891; 2015.5.6 KPM-NA0179173; 2015.10.8 KPM-NA017988.

【泉区】

シドキヤマアザミ *Cirsium shidokimontanum* Kadota

天王森泉公園で野の花会グループ（代表：山本登久）の方々の案内のもと2013年から2年間調査させていただいた。湿った場所にアザミが群生しているが、かつてはカササゲなどが生えていた湿った場所で、その下の石垣には絞り水が常に出ており、下は水路になっている（流れの中

にはミゾホオズギが生育している）その水路沿いで確認された。グループのメンバーの藤野志穂子さんがこのアザミはタイアザミとは違うのではないかと、当初からおっしゃっていた。このたび門田裕一氏に現地を見ていただく機会にめぐまれ（植物誌調査会会員中山博子氏のお世話による）、シドキヤマアザミと同定していただいた。同じ場所で採集したタイアザミ（2014.10.16 KPM-NA0176147）として提出した標本に関しては今後の検討を待ちたい。神奈川県内ではすでに相模原市南区で、柳 丈陽・門田裕一・中山博子・佐藤 康により2014年11月16日に採集された標本（KPM-NA0292061ほか）がある。

標本：横浜市泉区和泉町天王森泉公園 門田裕一・和田良子・佐々木シゲ子 2015.11.20 KPM-NA0182296（両性花；図2）；KPM-NA0182297（雌花）。

【戸塚区】

オオタチヤナギ *Salix pierottii* Miq.

泉区の境川遊水地の一つ下飯田遊水地（泉区）での報告（佐々木ほか、2011）以降、下飯田遊水地に流れ込んでいる和泉川の上流沿いにも何本かのオオタチヤナギが確認されている。今回同じ境川遊水地の戸塚区側の俣野遊水地でも確認された。

標本：横浜市戸塚区俣野 和田良子・佐々木シゲ子 2015.4.1 KPM-NA0179338 ♀

引用文献

佐々木シゲ子・野津信子・埜村恵美子・和田良子、2011. 2009年以降の横浜市内産植物について。Flora Kanagawa, (73): 878-880.



図2. シドキヤマアザミの両性花（横浜市泉区和泉町 2015.11.20 佐々木シゲ子撮影）。

湘南地域の丘陵域におけるハマカキランの記録

（岸 一弘）

ハマカキラン *Epipactis papillosa* Franch. et Sav. var. *sayekiana* (Makino) T. Koyama & Asai は、太平洋側海岸のクロマツ林下に生えるラン科の多年草で、神奈川県植物誌調査会編（2001）によれば湘南海岸のクロマツ林内の砂地に生えるとされている。近年の調査で、湘南地域の丘陵域数か所（図1）で本種を確認することができたので、以下に報告する。

なお、記録のとりまとめに際しご教示いただいた三輪徳子氏、埜村恵美子氏、大谷房江氏、未発表記録をご教示いただいた安井利子氏、調査に



図1. 湘南地域の丘陵域におけるハマカキランの記録地。

ご協力いただいた堀田佳之介，岸しげみ，武末範子，富岡誠一の各氏，神奈川県植物誌調査会藤沢グループの浅田正子，浅野牧子，早川典子，今井きみ子，埜村恵美子，寺井京子，鐵慎太郎，富岡真理子，大谷房江，白田三男の各氏（以下，藤沢グループ），調査に際し便宜を図っていただいた湘南カントリークラブの重田浩司氏，芙蓉カントリー倶楽部，平塚富士見カントリークラブに感謝

申し上げる。

【藤沢市】

8株確認：藤沢市大庭・芙蓉カントリー倶楽部
藤沢グループ・岸一弘・岸しげみ 2013.5.21 (図2)。

9株確認：藤沢グループ 同所 2013.6.20.

19株確認：藤沢グループ 同所 2014.5.9.

【茅ヶ崎市】

1株採集・10数株確認：茅ヶ崎市芹沢城之腰
安井利子 2005.6.19.

15株確認：茅ヶ崎市堤南谷 湘南カントリークラブ敷地周辺 岸一弘 2011.6.11 (図3)。

2株確認：同地 岸一弘 2014.5.4.

6株確認 (5株は蕾)：同地 岸一弘 2014.5.31.

8株確認，同地 岸一弘 2015.5.12.

1株確認：茅ヶ崎市赤羽根 湘南カントリークラブ 岸一弘 2015.6.3.

1株確認：同地 岸一弘 2015.6.29.

【中井町】

4株確認：中井町井ノ口 平塚富士見カントリークラブ，岸一弘・堀田佳之介・富岡誠一・武末範子 2015.5.22 (図3)。



図2. 芝地に生育するハマカキラン (藤沢市大庭 2013.5.21 岸一弘撮影)。



図3. 開花したハマカキラン (茅ヶ崎市堤南谷 2011.6.11 岸一弘撮影)。

箱根やぶこぎ会の紹介と近年の調査活動
(鹿野沙耶香・井上香世子)

箱根やぶこぎ会は『神奈川県植物誌 2001』に向けて箱根町地域を調査する目的で集ったグループです。県立生命の星・地球博物館と箱根町立箱根

湿生花園の職員を中心に，箱根の植物に関心がある者が集まり，1996年から定期的に調査活動を実施しました。未記録植物を探すため，おもに道から外れて調査したため，きついやぶこぎが多く，“やぶこぎ会”というグループ名となりました。活動

は『神奈川県植物誌 2001』の調査の終了に伴い休止しましたが、2014年、箱根地域を再度調査するにあたって、箱根に関心のある人が集まり、グループの名前を引継いで活動を行っています。

2014年10月～2015年8月活動記録

調査日：2014年10月8日（水）

調査地：箱根町元箱根 HAK-4

参加者：勝山輝男・石原和美・佐々木あや子・清水和子・三川節子・山本絢子・渡邊素直・鹿野沙耶香

コース：姥子～清水平～防ヶ沢分岐手前

概要：箱根やぶこぎ会として初めての調査。キョウタキシダ、コダイコンソウ、テバコモミジガサ、ハクモウイノデ、ホソエノアザミ、ヤドリギ等77種を採取。

調査日：2014年11月5日（水）

調査地：箱根町湯本 HAK-5

参加者：勝山・大西亘・佐々木・藤城節子・三川・山本・渡邊・石原

コース：湯本茶屋～三所山手前

概要：ヒメカナワラビ、オオベニシダ、オトメアオイ、ジャノヒゲ、アスナロ、カシワバハグマ、コウヨウザン、ヒサカキ等65種を採取。

調査日：2015年4月18日（土）

調査地：箱根町宮城野 HAK-6

参加者：井上香世子・勝俣洋一・佐々木・野上陽子・藤城・松浦ヤチヨ・三川・山本・鹿野

コース：宮城野～足柄幹線林道～碓氷梅園～宮城野

概要：今後調査を進めるにあたりHAK-1～HAK-6の6か所それぞれの担当者を決める。ナガバヤブソテツ、テリハヤブソテツ、クモノシダ等を採取。

調査日：2015年4月26日（日）

調査地：箱根町湯本・塔ノ沢 HAK-5

参加者：勝山・井上・支倉千賀子・松浦・三川・鹿野

コース：函嶺洞門～阿弥陀寺～塔ノ峰～送電線沿い～塔之沢～函嶺洞門

概要：ユウシュンラン、カゴノキ等65種を採取。

調査日：2015年5月5日（火・祝）

調査地：箱根町須雲川 HAK-5

参加者：勝山・大西・井上・石原・佐々木・野上・三川・鹿野

コース：東電畑宿発電所～送電線沿い～天狗沢～ワサビ田～畑宿発電所～須雲川

概要：シラコスゲ、ヒロハコンロンソウ、ヒメレンゲ等67種を採取。

調査日：2015年5月22日（金）

調査地：箱根町仙石原 HAK-1

参加者：勝山・佐々木・松浦・石原

コース：湖尻水門～長尾峠～耕牧舎～湖尻水門

概要：オニウシノケグサ、シバ、ヤマスカボ、ヤブコウジ、ツクバネウツギ、ナガバノスミレサイシン、オオイチゴツナギ、セイヨウタンポポ等42種を採取。

調査日：2015年5月24日（日）

調査地：箱根町芦之湯・元箱根 HAK-4・HAK-5

参加者：勝山・松浦・山本

コース：芦之湯～湯ノ花沢、精進池、お玉ヶ池

概要：コジュズスゲ、ミスジナガハグサ等53種を採取

調査日：2015年6月5日（金）

調査地：箱根町箱根 HAK-2

参加者：勝山・野上・三川・松浦・石原

コース：箱根峠～海の平、山伏峠～杓子峠、湖尻峠

概要：トボシガラ、ヌカボ、ハルジオン、ヒメスゲ、チチコグサ、ヒゴクサ、ニイタカスゲ、ヒメウワバミソウ等68種を採取。

調査日：2015年6月13日（土）

調査地：箱根町宮城野 HAK-6

参加者：勝山・大西・清水・深町篤子・松浦・三川・山本・鹿野

コース：宮城野別荘地～明神ヶ岳～宮城野別荘地

概要：ニイタカスゲ、タガネソウ、サワギク等54種を採取。

調査日：2015年6月27日（土）

調査地：箱根町湯本・大平台 HAK-5

参加者：勝山・大西・松浦・三川・鹿野

コース：函嶺洞門～湯坂路～大平台分岐～大平台

概要：オオバチドメ、スズサイコ、サワダツ等25種を採取。

調査日：2015年7月11日（土）

調査地：箱根町宮城野・木賀・宮ノ下・底倉 HAK-6

参加者：勝山・大西・井上・石原・深町・藤城・三川・鹿野

コース：宮城野～東電川久保発電所～木賀～底倉

概要：オノエヤナギ、イヌブナ、ヒメガマ等69種を採取。

調査日：2015年7月25日（土）

調査地：箱根町畑宿 HAK-5

参加者：勝山・女川修・黒谷祐介・佐々木・深町・松浦・山本・鹿野

コース：畑宿～弁天山清流公園脇、畑宿～東電作

業道～飛龍の滝～畑宿

概要：キジノオシダ，ミズタバコ，オオキジノオ，オオヤマハコベ等 58 種を採取。

調査日：2015 年 8 月 1 日（土）

調査地：箱根町箱根・元箱根 HAK-2

参加者：勝山・井上・佐々木・三川・鹿野

コース：芦川～白浜～箒ヶ鼻～百貫ノ鼻～真田浜手前

概要：タカネマスクサ，ミヤマイタチシダ等 110 種を採取。

調査日：2015 年 8 月 7 日（金）

調査地：箱根町仙石原 HAK-1

参加者：勝山・佐々木・松浦・石原

コース：金時神社～金時山頂～乙女口

概要：アカショウマ，ナツノタムラソウ，オオカモメヅル，カタイノデ，タチゲキツネノボタン，タチネズミガヤ，イチヤクソウ，フクロシダ等 49 種を採取。

調査日：2015 年 8 月 15 日（土）

調査地：箱根町宮城野 HAK-6

参加者：勝山・井上・佐々木・深町・松浦・鹿野

コース：宮城野～碓氷梅園～足柄幹線林道～林道～宮城野別荘地

概要：オニルリソウ，オオツルウメモドキ，トダイアカバナ，イワアカバナ等 74 種を採取。

調査日：2015 年 8 月 31 日（月）

調査地：箱根町元箱根 HAK-2

参加者：勝山・井上・佐々木・清水・白土信子・高橋勉・松浦・山本・鹿野

コース：芦ノ湖キャンプ村～深良水門～亀ヶ崎～立岩

概要：キヨスミヒメワラビ，スズメウリ，オオイタドリ，ミヤマハハソ，ホソバナライシダ，アオミヤマトウバナ，ナガエオオカモメヅル等

101 種採取

※箱根地域では，自然公園法に基づく環境省の採集許可を得て採集を実施しています（調査会会員であっても許可のない者の採集はできません）。

2015 年 8 月以後の植物誌勉強会

（勝山輝男・支倉千賀子）

・8 月 29 日 オトギリソウ属とアカバナ属（勝山輝男）

オトギリソウは葉の基部近くが幅広く，多少基部が茎を抱くことでハコネオトギリ（コオトギリ）やナガサキオトギリと区別される。しかし，草刈などで主茎が切られたオトギリソウの葉は中央付近の幅が広く，基部もほとんど茎を抱かない。典型的なオトギリソウのほかこのようなオトギリソウの標本をあわせて観察し，葉に明点がなく，葉の縁に黒点が密にあること，萼片は縁に黒点が，内部に黒線が強く出ることなどでオトギリソウと判断できりことを確認した。そのほか，ハコネオトギリとクロテンコオトギリ，ナガサキオトギリの区別，コケオトギリとヒメオトギリの違いなどを標本で確認した。

・9 月 19 日 足柄峠周辺のスズダケ属，ササ属，スズザサ属（支倉千賀子・勝山輝男）

南足柄市の足柄峠に 9 時半集合。タケ・ササ類を観察しながら金時山方面への林道を歩く。アズマザサを用いてメダケ属の特徴，スズダケ属の特徴，ミヤマクマザサを用いてササ属の特徴，ハコネナンブスズを用いてスズザサ属の特徴を観察した。猪鼻砦のピークで解散し，足柄峠に戻るグループと夕日の滝経由で地藏堂に出るグループに分かれた。夕日の滝経由グループは下り始めてすぐにアズマザサを見出し，アズマザサ属の特徴を確認することができた。

2016 年度総会の報告

（事務局）

2016 年 4 月 9 日（土），生命の星・地球博物館において，2016 年度の役員会・総会が開催され，報告・議事とも，了承されました。

● 2015 年度 事業報告

● 2015 年度 決算報告・監査報告

● 2016 年度 予算

● 各ブロックの活動報告

2015 年度の各ブロックの活動についての報告
がありましたが、ここでは紙数の関係で割愛させて
いただきました。

● 2016 年度 運営体制

目次

中島 稔：横浜市でアキザキヤツシロランを確認.....	963
堀内 洋：神奈川県 タネツケバナ類.....	965
岡 武利：神奈川県にイワヤシダ出現.....	970
関口克己：シラホシムグラが出現！.....	970
木場英久：イネ科3種の古い分布記録.....	971
佐々木シゲ子・和田良子・野津信子：2013年以降の横浜市港北区・瀬谷区・泉区 （戸塚区）の植物誌調査.....	972
岸 一弘：湘南地域の丘陵域におけるハマカキランの記録.....	973
鹿野沙耶香・井上香世子：箱根やぶこぎ会の紹介と近年の調査活動.....	974
勝山輝男・支倉千賀子：2015年8月以後の植物誌勉強会.....	976
事務局：2016年度総会の報告.....	976
事務局：チェックリストと分布図集.....	978
編集後記.....	978

● 2016年度事業計画

る分類群の標記が変わっています。『2016年度のチェックリストについて』をご熟読の上、最後の年、精力的に調査いただければと思います。

『神奈川県植物分布図集 2016』についても、総会を欠席された皆様のお手元にも届いていると思います。この分布図集は、会員の皆様が採集され、各ブロックの標本庫に収蔵された標本データにより作成されたもので、一つの成果ではあります。とは言え、各分類群の執筆者による同定のチェックや植物誌への掲載の可否、分布図統合の検討などを得ていないものです。その意味では、あくまでも会員の作業用に作成したものになりますので、会員外への配布はお避けて頂ければと思います。

編集後記

昨年は諸事情により1号しか発行できずに申し訳ありませんでした。今年は何とか3号（少なくとも2号）は発行しようと総会后、即編集作業を始めました。早くから原稿をお寄せ下さったみなさま、お待たせしました。

また、植物誌調査が佳境に入り、事務局の事務手続きにも多少混乱を来しております。言い訳にはなりますが、会費の納入記録などご不明の部分がありましたら、遠慮なくお問い合わせください。

（田中徳久）

チェックリストと分布図集

（事務局）

4月9日に開催された総会において、2016年4月版のチェックリストと『神奈川県植物分布図集 2016』を配布しました。

チェックリストについては、その後、データを各ブロックにお送りし、順次、調査を担当される皆様の手に届いているかと思えます。今年度は、新しい植物誌に向けての調査最終年度でもあり、調査の効率化と採りこぼしのない調査を実施するため、昨年度までのチェックリストと見出しとな

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館内

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195

加入者名 神奈川県植物誌調査会

年会費 2,000円